

## エジプト人の歴史とアラブ性

福田安志

中東・北アフリカ地域では、イラン、トルコ、イスラエルを除くと、その他はアラブ民族を中心とするアラブ諸国である。シリア、イラク、サウジアラビア、リビア、モロッコ、パレスチナなどであるが、人口九〇〇万人のエジプトはその中心的な存在である。

エジプトでは二〇一一年にタハリール広場に集まった民衆によってムバラク大統領が倒され、その衝撃波がアラブ諸国に伝わり、「アラブの春」と呼ばれた激動を引き起こした。エジプトの持つアラブ性は中東を理解する上で重要である。本コーナーではアラブの視点からエジプトの歴史を理解する上で役に立つ本を何点か紹介する。

エジプトは七世紀半ばのアラブの征服でアラブの支配下に入った。当時のエジプト人はコプト語を話し、宗教的にはキリスト教徒であった。長い年月を経てアラブ化が進展し住民はアラビア語を話すようになり、多くはイスラーム教徒になった。

しかし、エジプトのアラブ国家としての発展は複雑な過程を経ていく。一三世紀半ばから一六世紀まではマムルーク朝（外国人の奴隷出身の軍人王朝）の統治下におかれ、一六世紀の初めから一九世紀にかけてはト

ルコ語を公用語としたオスマン帝国の支配下に置かれた。

オスマン朝期には、エジプトの支配層はイスタンブールから派遣された軍人たちでありアラビア語は脇役に置かれていた。この時代のエジプトの支配体制について解き明かしたのが、ライラー・アブドルラティーフ著『オスマン朝期のエジプトの行政』（一九七八年、アインシャムス大学出版）（アラビア語）<sup>(1)</sup>である。同書の中ではオスマン帝国のエジプト統治体制が軍事、行政、司法、財政などの面から詳述されている。

オスマン朝によるエジプト支配は一七九八年のナポレオンが率いたフランス軍のエジプト占領によって事実上終わる。ナポレオンはエジプト遠征に際し、バチカンで手に入れたアラビア語の活字を用い遠征船の中で宣言文を印刷し、上陸後に布告した。宣言文にはエジプト人を暴君の支配から解放すると記されていた。しかし、エジプトがエジプト人の手で統治されるようになるのははるか後の時代のことである。

一八〇五年にはフランス軍と戦うためにオスマン帝国がエジプトに送り込んだアルバニア部隊の副隊長だったムハンマド・アリーによる統治が始まった。ムハンマド・アリーは

アルバニア人であったともクルド系であったともされているが、いずれにしてもアラビア語を話さない統治者であった。彼はオスマン帝国に対抗し、有能な外国人を雇用して、エジプトの軍、教育、経済などの近代化を進めた。一八二二年に設立された政府印刷所であるブーラーク出版所の歴史を記したのがアブー・アルフトーハ・ラドワーン著『ブーラーク出版所の歴史』（一九五三年、政府出版所）（アラビア語）<sup>(2)</sup>である。その出版所からは政府の出版物や古典、実用書などがアラビア語で印刷出版されアラビア語文化の発展に大きく寄与することになった。

一九世紀半ばのスエズ運河の建設と開通によりイギリスやフランスなどとの関係が強まった。そうした中でエジプトはイギリスの支配下に置かれるようになったが、外国との交流の中で新しい文化も芽生えてくる。一八七五年には外国への窓口になっていた地中海の港町アレキサンドリアでアル・アハラーム新聞が創刊された。イブラヒム・アブドゥ・アル・アハラーム新聞（一七五五年のエジプトの歴史）（一九五一年、ダール・アルマリーフ）（アラビア語）<sup>(3)</sup>はその創刊とその後の発展について詳しく記している。アル・アハラームは今日ではエジプトを代表する新聞となっており、アラブ世界でも高い評価を得ている。アル・アハラーム新聞はレバノン人のキリスト教徒によ

って創刊されたものではあったが、エジプトでのアラビア語ジャーナリズムの発展に大きく寄与しエジプト人の活躍に道を開いた。

二〇世紀になると政治や経済でのエジプト人の活躍が進んだ。そして一九五二年にエジプトの自由将校団はムハンマド・アリー王朝の国王を倒し、権力を掌握した。いわゆる「エジプト革命」である。「エジプト革命」によってエジプト人の手にエジプトの統治が取り戻されたのであった。その中心は、後のエジプト大統領となるナーセルである。ナーセルはアラブ・ナショナリズムを唱えアラブ世界に大きな影響を与えた大統領で、彼に関する文献が多数刊行されている。アジア経済研究所の図書館にも何点か収蔵されている。機会があれば閲覧していただきたい。

（ふくだ さだし／アジア経済研究所 新領域研究センター）

### 《注》

- (1) Laila Abdul Latif Ahmad, *Al-Ihdarat fi Misra fi al-Asr al-Uthmani*.
- (2) Abu Al-Futuh Radwan, *Tarikh Matbaat Bulqa*.
- (3) Ibrahim Abdulh, *Jaridat al-Ahram, Tarikh Misra fi Khams wa Sbbain Sana*.